

短期大学部から4年制大学へ

～何が引き継がれたのか、卒業生に聞く～

松永 裕二

今年2024年は、西南学院大学短期大学部児童教育科が4年制の文学部児童教育学科に改組されて半世紀、50年の節目にあたる。アーカイヴズ編集委員会から、これを記念して児童教育学科（以下、「児教」と記す）50年の特集号を出すことにしたので、原稿を執筆いただきたいとの依頼を受けた。

依頼内容は、児教開設当初の頃の学科の様子（短大から児教に移行した当時在職されていた先生方についての思い出やエピソードなど）について執筆をということであった。お引き受けはしたものの、私が児教に赴任したのは1984年（昭和59年）で児教に改組されてから既に10年が経過しており、学科内で短期大学部（以下、「短大」と記す）時代の話が日常的に出てくることはあまりなかった。赴任当時、上野武先生（故人）、岩城富美子先生（故人）、尾崎恵子先生（故人）、堺太郎先生、中川ノブ先生（故人）、森川和子先生（故人）らが児教にはご在職中で、これらの先生方は、10年前の改組を体験されていて短大時代のキリスト教主義に基づく幼児教育・保育の専門家養成に強い矜持をお持ちであることを、児童教育部教授会でのご発言などを通して実感したことは度々あった。

原稿執筆に当たってこれらの先生方に直接お話をお聞きしようかと思ったが、先生方の多くが既に亡くられており、ご存命中の先生も健康上の理由などから直接お会いするのは無理なようであった。そこで、短大から児教への移行時に在学されていた4名の方々にお集まりいただきお話を伺うことにした。会場は、西南学院百年館、実施日時は2023年9月29日の10時30分から12時までである。

お集まりいただいたのは、短大の最後の卒業生の方2名と児教の第一回卒業生2名の計4名である。児教は1974（昭和49）年に開設され第一回生139名が入学したが、短大の最後の卒業生はその時短大2年生として在学中であった。よって、この4名の方々は、1年間だけではあるが同時に在学されていたのである。

座談会では、まず4名の方々に自己紹介をしていただき、それから①大学入学の動機、②大学での授業や先生方の思い出、③サークル活動や部活動、④後輩や大学、児

教への要望やエール、について自由に語っていただいた。紙幅の都合上、座談会の内容を逐一全て紹介するわけにはいかないので、本稿では4名の方々のご発言を通して明らかになった「児教が短大から引き継いだこと」について、纏めたいと思う。

それに先立って4名の方々をご紹介します。4名の方々の年齢は現在60代後半。短大のお二人はともに地方のご出身で入学後は一麦寮に入寮、児教のお一人も入学後一麦寮に入寮。4名全員に共通している点は、卒業後、幼稚園、保育園、障がい児支援施設などに長らく勤務された点である。全員大学入学前からこの分野に関心があったので、短大や児教を進学先に選んだとのことであった。母親から資格を持つように言われたのも短大入学の動機の一つだったと話された方もいた。この方は、「当時の短大は入学難易度がかなり高かったので、合格を知った時は神様に導かれたと実感しました」とも話された。このように、この4名の方々は、卒業後、幼児教育・保育・福祉の分野において正にキャリア・ウーマンの先駆的な存在であった短大卒先輩の後継者として社会で大いに活躍されたのである。因みに、昭和37（1962）年9月10日付けの『西南学院大学新聞』には、その当時の短大生について次のように記されている。

「一般女子学生のように『結婚のために』『暇だから』というような消極的な目的で入ったものはほとんど居ず、又それで入ったにしても授業を学ぶ過程において本当にこの大学で学ぼうという意識を強く覚えてくるようである。二年間のうち彼女達は社会人としての意識を発達させているのである」

前半の文言は、今日ではさすがにジェンダーバイアスとの誹りを免れぬかもしれないが、後半に関しては当時の短大生のキャリア志向を端的に物語っていると思う。

さて、「児教が短大から引き継いだこと」は、次の4点に要約できそうである。1.「聖書」との初めての出会い、2. つるべ渡し、3. 毎週水曜日は実習の日、4. 先生方との距離の近さ、である。

1. 「聖書」との初めての出会い

西南学院大学への入学者のほとんどは、入学して初めて聖書に出会うことになる。座談会の参加者のお一人（短大入学者）からは、聖書との感動的な出会いがこのように語られた。

「聖書ってどんなものだろうと思っていたら、聖書には高校の世界史で学んだ『出エジプト』や『バビロン捕囚』の話などが出てくることを知り、そうか、聖書は、色々な世界史の出来事に関連づけながらキリスト教の歴史や神様の教えを学んでいくものなのだど気付いて、聖書への興味が湧き、しっかり学びたいと思うようになりました」

聖書との最初の出会い方は、人それぞれであろう。親や家族がクリスチャンで生まれながらに聖書に馴染んでいる人もいるだろうが、それはもちろん少数派で日本人の多くは聖書に馴染みはない。大学生もしかりで、国立大学の学生も私立大学の学生もミッション系大学でない限りは、大学生活でも日常生活でも聖書に親しむことはない。他方、ミッション系大学（中高）への入学者は必ず聖書と出会うことになる。しかし、問題はその出会い方だろう。不本意ながらもミッション系大学に入学した学生が、キリスト教関連の必修科目の単位を取得するためだけにひたすら聖書を暗記させられるとすれば、その人にとって聖書は苦しみを与えるものとなる。このような出会いは不幸だ。高校での学びと聖書との結びつきを理解されたこの方は、聖書との素晴らしい出会いを体験されたと言えるだろう。座談会に参加された他の3名の方々も、聖書との良き出会いをされたことだろう。実際に4名全員が在学中にキリスト教主義の保育、幼児教育をしっかりと学ばれ、卒業後はそれを現場で活かされたのであるから。

2. つるべ渡し

座談会では「つるべ渡し」も話題にあがった。「つるべ」とは漢字で書くと「釣瓶」で、これは井戸の水を汲み上げるために縄または竿を付けた道具（桶）のことである。「秋の日は釣瓶落とし」という言葉がある。これは、秋の日は井戸の釣瓶が落ちるように太陽が早く沈み暮れてしまうこと、秋の夕暮れが早いことのとえであるが、「つるべ渡し」という言葉は一般には恐らく誰も聞いたことがないであろう。「つるべ渡し」は、西南学院大学では児童教育学科（及び2001年に新設された社会福祉学科）の学生、教員のみが継承してきた伝統ある大切な儀式である。



短期大学部当時のつるべ渡し

短大、児教の教授で舞鶴幼稚園園長も長らく務められた故尾崎恵子先生は、「つるべ渡し」について次のように書かれている（『西南学院史紀要』第6号「児童教育科の隅の頭石として－西南保姆学院・福岡保育専攻学校－」、https://www.seinan-gu.ac.jp/pub/100aniv/kiyo/06/06_81_86.pdf）。

「（西南学院大学短期大学部児童教育科の前身である福岡保育専攻学校の）卒業式の大切な儀式として始められた『つるべ渡し』は、私が卒業した次の年（1946年、昭和26年）から始まったんですよ。現在（2010年）も続いているようですが、これは大切な行事です。福永先生が活水女学校の教員時代にも行われた儀式と聞いています。活水というのは『活ける水』と書きますが、キリスト教教育の中に流れる水脈、『真理の水脈に触れてその生命の水を汲むものとなるように』という精神を受け継いで、先輩から後輩に譲り渡していく。その象徴として『つるべ渡し』が行われたのです。卒業式には卒業生がたくさん来て、讃美歌を歌い、現在も続けられていることをうれしく思います。つるべには、卒業年度を記したカラーリボンがつけられています」

「つるべ渡し」は、児教に移行後一時途絶えたが、その後復活して卒業式に先立って実施される謝恩会でこの儀式が執り行われることになった。しかしながら、数年前から新型コロナウイルス感染症の蔓延に伴って謝恩会も中止せざるを得なくなり、「つるべ渡し」も実施できない状況になっている。加えて、現在では、今日この儀式の意味や意義は卒業生や教員・学生に正しく理解されているのだろうかと少し不安に思うこともある。ヨハネ4章14節には、「わたしが与える水を飲む者は、いつまでも、かわくことがないばかりか、わたしが与える水は、その人のうちで泉となり、永遠の命に至る水がわきあがるであろう」とある。改めてこの聖句の含意を確認することが必要であろう。

ともあれ、一時中断があったとはいえ、福岡保育専攻学校から短大、児教へと80年近くも継承されてきたこの「つるべ渡し」の存在意義は大きいと思う。座談会に出席された皆さんからも、この伝統はこれからも絶やすことなく是非大事に引き継いでいってほしいとの要望の声があがっていた。現在では、新型コロナウイルス感染症も収束したようなので、児教、社会福祉学科での「つるべ渡し」の再復活をこれからは非期待したいものである。

3. 毎週水曜日は実習の日

大学での授業や生活についてお聞きした時、「とにかく毎日がとても忙しかった。暇な時はほとんどなかった」と短大卒のお二人は口を揃えておっしゃった。短大では大まかにいえば4年間で取得する単位を2年間で取得するようになっていたので、毎

日授業に追われざるを得なかったのだろう。「4大生はのんびりできていいなあとし羨ましく思った」との本音の述懐もあった。短大生が極めて多忙であった大きな理由の一つは、当時2年次になると毎週水曜日が丸一日実習の日に当てられていたことである。実習は、短大の実習園である舞鶴幼稚園、西南幼稚園、早緑子供の園、汀幼稚園、東福岡幼稚園などで行われていた。大学での授業の準備だけでなく、水曜日実習の事前準備や反省も怠りなく手抜きすることなくやらなければならない。忙しいはずである。「大学の1週間は、水曜日を中心に目まぐるしく過ぎていきました」というご発言は、当時の短大生の超多忙な大学生活を如実に物語っている。当時実習生は「水曜日の先生」と呼ばれていたそうである。

毎水曜日実習は、児教に移行後も暫くは継続されたようだが、私が児教に赴任した1984年には年に1、2回、2週間から4週間連続しての実習に変更になっていたように思う。その理由についてはよく分からないが、両者のメリット・デメリットが検討された結果だったのであろう。一般に、教育（保育）実習は、学生が教員や保育士の道を最終的に選択するうえでかなりの影響力を持つといわれている。どんなに厳しく多忙な実習であったとしてもそれが実習生にとって充実したものであったならば、実習生の多くはそこに将来の自分の道を見出すであろう。もちろん、実習を通して自分が教職や保育士には向かないことを再認識する実習生もいるであろう。しかし、自分の適性が確認できたという意味では、実習はそれはそれでその実習生にとって有意義だったといえると思う。

毎週1回の実習の最大のメリットは、1年間の実習を通して園児の成長を実感できる点にあったと思うが、他方では週1回の単発的な実習、細切れ実習の繰り返しになりかねないというデメリットも無視できなかったのだと思う。現行の2週間、4週間の継続的実習に加えて週1回程度の実習も年間を通して実施できれば理想的なのだろう。福岡市の「学生サポーター」制度を有効に活用すれば、一定期間のみの実習の弱点を補うことができるのではないだろうか。因みに、福岡市教育委員会は、学生サポーター制度について「福岡市教育委員会と協定を結んだ大学から派遣される学生を、福岡市立の小・中・高・特別支援学校で受け入れ、授業や学校行事、教材づくり、休み時間、部活動など、さまざまな教育活動のサポートをして参加してもらうものです（<https://www.city.fukuoka.lg.jp/kyoiku-iinkai/kyoushokuin/ed/053.html>）」と説明している。西南学院大学も協定を結んでおり、児教の学生の一定数が学生サポーターとして定期的に学校を訪問し学校・子どもサポートの様々な活動に従事しているとのことである。今後、児教としては、この制度の有効活用がいっそう望まれるであろう。

4. 先生方との距離の近さ

座談会では次のように当時の先生方の思い出も語られた。「短大時代にはチャペル・グループ（学生の少人数集団に先生が1名ずつ所属）というものがあって、その指導の先生からはまるで身内のように親しくしていただいた」、「叱られたり厳しく指導されたりすることもあったが、そこには愛情が籠っていたと思う」、「学生一人ひとりをととても大事にしてくれた」等など。

このように、「学生と先生方との距離が近く、繋がりも深く、関係もかなり濃い」というのは、短大の大きな特徴の一つであったようだ。もちろん、この特徴は、児教にも引き継がれ今日に至っていると思う。児教は、他の学部・学科（神学部を除いて）に比べて学生・教員比率やゼミの定員数が小さく、授業においても保育士資格（以下、「保免」と記す）や幼稚園教諭普通免許状（以下、「幼免」と記す）・小学校教諭普通免許状（以下、「小免」と記す）を取得するために必修の、ピアノ、幼児体育、絵画工芸、調理などでの実技、自然科学での実習や実験などがあるので、その担当の先生方との関係は自ずと「近い」ものになる。実際、私自身も在職中にこのことは実感していたし、他学部の学生や先生方からも羨ましいといわれたりした記憶もある。

しかし、先生方との距離が近いことは、今日では教員による学生のプライバシー侵害さらにはパワハラやセクハラなどの誘因にもなりかねず手放しには喜べない面もある。大学においても「先生方との距離が近いこと」は本来望ましいことのはずだが、それを手放しには喜べないとは、大学・教員にとって厳しく難しい時代になったものだとつくづく思う。

座談会では最後に、後輩や児教、大学への「エールの一言」をお願いした。これに関してでは次の2点を紹介したい。一つ目は、児教の卒業生には幼稚園教諭や保育士をもっと目指して欲しいとの声があがったことである。確かに、1985年に小免課程を設置以来、男女共学になったこともあってか卒業生の就職先は、小学校教諭や一般企業にシフトするようになり、幼稚園教諭、保育士として就職する卒業生はかなり減少することになった。因みに、2022年度では、卒業生の2人に1人は小学校教諭になっており、幼稚園、保育園への就職者は15%にも満たないというのが現状である。児教でキリスト教主義の教育を受けた卒業生が小学校現場で大いに活躍するようになったのは結構なことだが、幼稚園、保育園に就職する者がこのように激減してしまうようでは短大から引き継いだ良き伝統が危うくなってしまふ。幼稚園、保育園の先生の待遇や労働条件は、小学校の先生に比べると確かに良くない。しかし、今日我が国でも、就学前児童の子育て支援は、幼稚園教諭・保育士の待遇改善も含めて、以前に比べてかなり充実しつつある。2023年4月には内閣府に「子ども家庭庁」も新設され

たので更なる充実が期待されよう。

人の人生は、就学前教育次第で良きものにも悪きものにもなる可能性があるといわれている。だからこそ、児教の先生方、学生の皆さんには、幼稚園教諭、保育士の養成において大きな足跡を残した短大の良き伝統を絶やさぬようにこれからも頑張っていたらきたいと思う。



写真左から筆者（司会）、横田哲子さん（短大卒）、泉美智子さん（短大卒）、
小山千鶴子さん（児教卒）、松山恵子さん（児教卒）

もう一つ、特に印象に残ったのは、大学（児教）の「自由な雰囲気」をこれからも最大限大切にしてほしいというご発言だった。大学の自由な雰囲気のもとで、一人ひとりの意見や考えを尊重することや適切に自己主張することの大切さを学ぶことができ、その学びを職場でも活かすことができたからだとのことであった。思うに、西南学院大学はリベラル・アーツ・カレッジであることを標榜している。リベラル・アーツ・カレッジの精神は、大学の「自由な雰囲気」のもとでしか育むことはできない。児教では、保免、幼免、小免の3つの資格・免許状を取得することができる。しかし、それを取得するかどうかは学生の判断に委ねられており、取得が強制されること（具体的には保免、幼免、小免のいずれかの取得を卒業要件とすること）は一切ない。児教で学生が何をどう学ぶか、これは学生の全くの自由である。大学の「自由な雰囲気」は、児教ではこのような形によってでも具現化されているのである。

「付度」という言葉が我が国の至る所に蔓延っている。本当の自分の気持ちや意見を自由に表明することができないというのは、その個人にとってのみならず社会や国家にとっても不幸なことである。ロシア・ウクライナ戦争（2022年2月～）とハマス・イスラエル戦争（2023年10月～）で世界が大揺れしている今日、我が国だけでなく

世界中で「忖度」が蔓延しました。人々は自由にものをいうことができなくなっている。これからも「自由な雰囲気」を大切にというご発言・ご要望は、このような現状への警鐘なのかもしれない。

最後になるが、座談会にご参加いただいた4名の方々のお陰で、上記のように兎教が短大から引き継いだことを確認することができたし、「エールの一言」で身が引き締まる思いにもなった。4名の方々に厚くお礼を申し上げたい。